幼稚園・保育園による「子ども主体の協同的な学びプロジェクト」
合同発表会　結果報告

【日　　時】平成３０年２月２６日（月）１８時００分～２０時３０分
【会　　場】すみだリバーサイドホール　イベントホール
【来場者数】２６７人［公立保育園１４３人、公立幼稚園１５人、私立保育園４３人、私立幼稚園１４人、一般参加者３５人、区職員１７人］

≪開会挨拶≫
（写真左）山本区長
（写真右）長田氏（乳幼児ワーキンググループ専門部会長）

≪プロジェクト趣旨説明≫
大豆生田氏
（墨田区子ども・子育て会議会長）

≪会場の様子≫
幼稚園・保育園関係者をはじめ、多くの方にご参加いただきました。

【内　　容】

■第１部（１８時１５分～１９時２０分）

取組発表

【発表園】

立花幼稚園、言問幼稚園、横川橋保育園、ひきふね保育園

≪取組発表≫
（写真左から）立花幼稚園、言問幼稚園、横川橋保育園、ひきふね保育園
４園とも特色ある「子ども主体の協同的な学び」の実践を発表し、それぞれの担当アドバイザーからコメントをいただきました。
会場全体が４園の発表とアドバイザーのコメントを真剣に聞き入り、発表後には大きな拍手をしていました。

■第２部（１９時３０分～２０時２５分）

パネルディスカッション

【コーディネーター】

大豆生田 啓友 氏（玉川大学大学院教授、墨田区子ども・子育て会議会長）

【パネリスト】

髙嶋 景子 氏（田園調布学園大学大学院教授、墨田区子ども・子育て会議委員）
岩田 恵子 氏（玉川大学大学院教授）
松山 洋平 氏（和泉短期大学准教授）
三谷 大紀 氏（関東学院大学准教授）

≪パネルディスカッション①≫
コーディネーター：大豆生田氏

≪パネルディスカッション②≫
パネリスト：（左から）高嶋氏、岩田氏、松山氏、三谷氏

≪パネルディスカッション③≫
会場より質問表で声をいただきました。内容の濃い話しになりました。

子ども主体の協同的な学びプロジェクト
～子どもとともに～

平成 30 年２月 26 日
墨田区立 立花幼稚園

1 所在地

東京都墨田区立花 1-25-9　　東武亀戸線　東あずま駅下車（徒歩５分）

2 教育目標

人権尊重の精神を基調に、健康で心豊かな幼児の育成を目指し、生涯にわたり生きる力の基礎を培う教育を推進し、次の教育目標を設定する。

○ 心も体も元気な子ども　　（げんき）
○ 自分で考え行動する子ども　（やるき）
○ 最後まであきらめない子ども（こんき）

3 学級編成

２年保育４歳児	き　く組	24 名
２年保育５歳児	さくら組	20 名
合計		44 名

（平成 30 年２月現在）

4 研究の概要

（1）『子ども主体』とは

私たちは『子ども主体』とは「発達に即した適切な環境の中で、『決定権』が子どもにあること」だと考えている。しかし、それは全てを子どもに委ねるということではなく、保育者側の意図的・計画的な保育の構想が重要であり、子どもの主体性と保育者の主体性は切り離して考えられるものではないと考えている。

（2）『協同』とは

私たちは『協同』とは、「共通の目的に向かって意見を出し合い、分担したり協力したりしながら遊びや生活を進めること」だと考えている。そのためには、保育者の丁寧な子どもの姿に対する見取りと、意図的・計画的な準備や援助が重要である。

（3）幼児期の育ち

幼児は、初めての集団生活の中で、様々な環境と出合い、保育者との信頼関係を基盤としながら安定して過ごせるようになる。幼児期にふさわしい生活を通して、少しずつ自己を発揮し、人間関係を広げ、互いに関わりを深めていきながら、育ち合っていく。

その育ちの中で、友達と一つの目的に向かって活動を進めることを通して協同する経験を積み重ねられるよう、発達に即した活動を意図的、計画的に取り入れ、進めている。

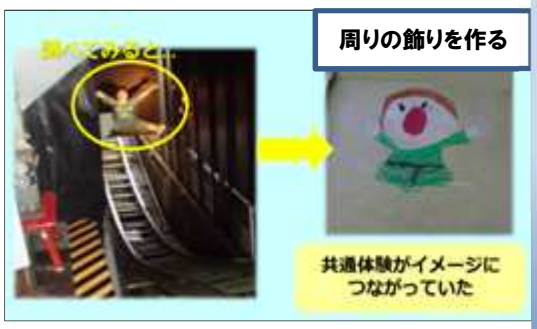
年長１１月　遊園地ごっこ
遠足で花やしきに行った経験から、
自分たちの遊園地を作る活動

（4）実践事例：年長５歳児　１１月　遊園地ごっこに向けての取組

メンバーが集まり、互いにどのようなイメージをもっているのかを出し合う場面で、保育者は「どういうものが作りたい？」と投げ掛けた。ところが、積極的に意見を出す子どもがおらず、この日の話し合いはほとんど進まなかった。

次の日、保育者がイメージをかなり具体的に引き出したり、それぞれのやりとりを仲介したりする援助を行うと、少しずつ子どもたちから意見が出るようになり、イメージがかたまってきた。

共通のイメージが定まると、毎日続きにしながら、少しずつ乗り物作りを進めていった。形になってくると嬉しく、子どもたちの姿が少しずつ変わってきた。



ある日、子どもたちは、ただ乗り物を走らせるだけではなく、トンネルを作りたいと保育者に伝えに来た。紫色の絵の具を塗り、乾いたらそこに「びっくりしているおじさん」を付けると言う。子どもたちの言う「びっくりしているおじさん」とは一体何のことなのか疑問が湧いた保育者は子どもたちに聞いた情報を基に、インターネットで調べた。

すると、びっくりしているおじさんの正体は花やしきのジェットコースターのトンネルに飾られていた人物だった。次の日に子どもたちに確認すると「そうそう！この人！」と確証を得ることができた。保育者の知らないところで子どもたちは理解しており、共通体験がイメージにつながっていた。

その後、自分たちで並べた積み木の高さに合わせて段ボールを切り、壁を作って塗った。さらに、「もっと可愛くしたい」と、みんなで話し合い、飾りをリボンに決め、丁寧に仕上げていった。

完成したジェットコースターのコーナーには、大量のリボンが貼ってあり、その数にみんなが驚いた。

協同性の深まり

（5）まとめ　〈このテーマを通して学んだこと〉

○ 一人一人が生かされてこその協同である

今回、改めて協同とはなにかを考えていく中で、全体を捉えるだけでなく、もっと一人一人の姿に目を向けることが大切であることを学んだ。「みんなで何かに取り組めばいい」、「でき上がればいい」という結果ではなく、プロセスの中で、一人一人が『**他でもない自分がそこに必要とされている感覚**』をどのようにもてるようにするかを常に考えながら一緒につくりあげていく意識をもつことが必要であるということを学んだ。

○ 一人一人のプロセスを捉える視点が大事である

一人一人の学びは異なり、プロセスの中に学びがある。それは、結果を捉えるのではなく、一人一人が何を考え、何をしようとしているのか…その姿を捉えることが大切であるということ、別々のことをしていても同じ目標に向かっていることが大事であり、保育者はみんなに同じことを経験させることだけに価値を置かずに、もっと『**一人一人の学びを読み取る意識をもつこと**』が大事だと学んだ。

今後も、一人一人の学びを丁寧に読み取りながら、共に学び続ける保育者として、子どもたちの健やかな成長を支えていきたい。

「子ども主体の協同的な学びプロジェクト」合同発表会　資料

私立　言問幼稚園

当園は昭和 24 年９月に東京都の認可を受け開園しました。以来 60 年以上保育を続け、卒園児は 6,000 余名を数えます。平成 19 年には新しく園舎も建築され、さらに耐震のためにもう一方の園舎も平成 25 年２月に改築されました。隅田川や隅田公園など、周囲の環境も緑多い良好の地にあります。
お寺の幼稚園として華美をさけ、園児の情操教育に力を入れ、良い習慣を身につける保育を地域の信頼のもと、教職員一同、努めています。昨年度に引き続き、２年目のプロジェクト参加になります。

◎ 園の保育目標

清　明	仏さまを拝み、明るく素直な子に
強　く	どんなことでもやり通し、正しい考えをもつ子に
豊かに	人間性の豊かな表現力を身につける子に
仲よく	相手の立場をみとめあい、いのちを大切にする子に

◎ 学級編成

年少（３歳児）：２クラス（各クラス２人担任）→ばら組 31 名、さくら組 31 名
年中（４歳児）：２クラス（各クラス１人担任）→ゆり組 33 名、きく組 30 名
年長（５歳児）：２クラス（各クラス１人担任）→たけ組 28 名、うめ組 27 名
フリー教諭配置（フルタイム２名、パートタイム１名）

◎ ５歳児（たけ組　うめ組）　今までの経過

4 月：環境を整える

☆部屋を変えてみる
部屋の作りや位置、デッキのスペースを考えて、今まで年少で使っていた部屋を年長に、年長に使っていた部屋を年少クラスの部屋へと変更することにして、トイレの仕様やドアのカギなどの整備をしました。

☆大きなワゴンを置く
昨年まで年長で使っていた制作ワゴンを年中クラスへ置き、沢山材料を置いておけるワゴンを新しく年長用にしました。

1 学期

いろいろなものをつかって、いろいろな場所でつくったり遊んでみよう。

年長クラスに新しく設置した制作ワゴンに担任が素材を準備し、子どもたちが自由に使って良いことにしました。保護者の方にも協力して頂いて、廃材を集め、使えるように置いておきました。

いろいろな素材をえらんで自由につかってみよう

造形の時間で色々な素材をつかって制作をします。色々な素材をえらんだり、組み合わせてつくることに慣れ、自由遊びの時間でもいろいろなものをつかってつくったり、遊んだりするようになりました。

皆で協力してつくってみよう

造形の時間に皆でそれぞれを出し合って、ひとつのものをつくる体験をかさねていきます。

1 学期～2 学期

個人で考えてつくったもの➡複数でつくって楽しむ➡遊びのブームをつくろう

はじめは単素材でつくったり、遊んだりしていましたが、担任が用意する素材をかえたり、時には制限したりすることによって、つくるものが変わり、それを持ち寄って遊ぶことにより、さまざまな「遊びのブーム」がうまれました。
たけ組―こま遊び　　うめ組―お店屋さんごっこ

成道会お遊戯会での取り組み

プログラム内容がパターン化している。

昨年度まで・・・

年少：1 クラスを 2 チームに分けて、ダンス。
年中：セリフの吹き込まれた音楽劇
年長：自分たちでセリフを言う劇

配役は、子どもたちの希望をききながら担任が決め、内容・セリフ・振り・衣装は全て担任が決め、作成している。

毎年、内容は違ってもよいはず・・・
↓
今年度は、各学年とも今までの方法にとらわれずに、演目・内容を考えてみることにする。
（絶対に変えなくてはいけないわけではない）
「先生と子どもたちが一緒につくりあげる」ことを念頭におく。
年長は、子どもたちが話し合って決める要素を取り入れるようにする。

〇演目の決定：２クラス合同で実施する。２冊の絵本から題材を多数決で決定。
〇配役の決定：第４希望まで希望をとり、担任が決定。
〇内容の決定：大まかな内容は、担任が決定した。配役グループごとに短時間で出し物をすることにして、その内容を子どもたちで話し合って決める。
〇衣装の決定と制作：各グループごとに意見を出し合ったものを担任がイラストにする。それをもとにして実際の材料を出し、グループ内で相談しながら衣装をつくっていく。
〇小物の決定と制作：グループごとにサンプルを作った後に、皆で個々の物を作る。
〇劇の練習

◎ 気づいたこと・今後の課題

- 子ども自身が素材を生かして遊びに発展させるには、いろいろな素材に触れて使ってみる経験を積み重ね、慣れていくことが必要。
- 用意する素材や場所をパターン化せずに少し変えてみたり、時には緩く制限したりすることで、子どもたちが工夫する幅がひろくなっていく。
- 「面白い」と思ったことには、期限を設けずにとことんつづけられる環境をつくると、空いた時間に同じあそびを自分たちでつづけている。
- 子どもたちの「もっと」を引き出すためには、指示よりも保育者の「提案」が有効である。その提案は、必ずしも子どもたちの思いと合致するものではないが、子どもたちの様子を観察しながら、保育者の提案の内容を変化させていくことによって、子どもたちがその提案をききながら、「どうしたいのか」をより深く考えていくようになる。
- 子どもたちですすめていると、内容に「おかしさ」が生じてくる。その「おかしさ」に気づき、「だからどうなるのか」を考えることが大切。
- 話し合いの場を少人数であったり、グループ・全体であったり、規模や話し合いの時間帯を変えることによって、意見の出しやすさや共有の時間をもつなど、保育者が工夫していくことが大切。
- 保育者自身の探求心と遊び心が、子どもたちの「もっと」の気持ちや、発想を引き伸ばす要因ともなる。担任だけではなく、他の職員とも連携を取り、実際の場で共有することによって、より多くの気づきとその実践に結びつけることができる。
- 周囲の「もっと」についていけない子どもの存在を気に留め、配慮する必要がある。

墨田区立横川橋保育園 きりん組 男児９名 女児 14 名(認定児３名) 担任２名

◎保育目標

・元気にあそぶ子ども　・友だちと仲よくあそぶ子ども

・自分で考え行動する子ども　・豊かな感性を持つ子ども

◎園児定数

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	合計
定数	11名	15名	18名	21名	25名	26名	116 名

＜きりん組が一年間大切にしてきたこと＞

子ども達の気持ちに寄り添い一緒に考え、自主的にできるよう『待つ保育』を心掛けてきた。

子ども達が自信をもって言えるように意図的な働きかけをし、言える環境を作ってきた

ねらい　子どもたちが興味関心をもち、やりたいこと思ったことを大切にして仲間と思いを共有しながら意欲的に取り組む

ハロウィンごっこの取組み　★10/6～30 の保育(ハロウィンは 10/31)

保育士の心の声

保育士の想い・関わり　　子どもの姿

ハロウィンごっこ、やりたいかな？

（フルーツバスケットをやりたいと言う声）フルーツだけじゃなく、スイーツとか今の時期だとハロウィンもいいんじゃない？

「ハロウィン」「やりたい」「前のきりん組がやってた」と言いながらもハロウィンバスケットを楽しむ

遊びの後、円隊形のまま話し合いをする

「迷路したい」「でんきを暗くしておばけやしきみたいにしたい」「ダンボールで作りたい」「おばけの形の迷路したい」…

大人じゃ思いつかない

子どもたちのアイディアを付せんに貼り可視化 何を作るか？何が必要かとなげかける

どんどんイメージがふくらんでる

「途中に木を作りそこにコウモリをぶら下げる」「戸を作ってそこからおどかす」「途中にクイズを出してあたらなかったら行き止まり」など日頃あまり意見を言わない子どもからもアイディアが出る・・

子どもってすごいな

自分たちだけでなく、来てもらう(他クラス)ために「ポスターを貼る」「チケットを配る」などの意見がでる

クラスだけじゃないのね

大きいダンボールが必要なら近くに納豆工場があってそこには大きなダンボールがあるよと伝える

「自分達でダンボールを取りにいきたい」とまとまりクラス全員で納豆工場にダンボールをもらいにいく

ダンボールの量も見通せるんだぁ？？

イメージを大切に助言していくが誰が何をするなどの分担については何も言わず見守る

配置図・分担・役割を伝える？どうする？でも子どもに任せてみよう

自分の着る衣装を作るときに友達同士でアレンジを出し合い本を参考にしながら作る　進めていくうちにさらにイメージが膨らみテープを貼る、おばけを描く、迷路の道筋を考えるなど子どもたちで役割を決め、自分から気づいて作り上げていく

子ども達の方がちゃんと動ける！

日頃の空き箱制作の成果かな？

◎取り組みから

４歳児の時に年長の活動をみて憧れを持っていた。自分たちが年長になると、『何かやりたい』という思いをずっと持っていた子ども達。日々の活動、遠足、水族館見学などを経験する中で自信も出てきて、『何かやりたい』という思いはさらに大きくなっていった。子ども達から具体的に何をどうするかまでは発信がない姿を見て、担任からきっかけ作りをしてみた。きっかけがあって子ども達の気づきや思いがあふれ、子ども達の意欲・発想につながり、結果、形になり達成感につながった。

お楽しみ会の取り組み　★10/20 の出来事　（お楽しみ会は 12/8）

保育士の想い・関わり方　　子どもの姿

ハロウィンで気持ちはいっぱいだけど決めないと。時間がない

お楽しみ会は何をやりたい？

4つの題材から『おしりたんてい』『どろぼうがっこう』の2つが残る

2つになった これで決まるかな

手を上げた子がやりたい理由を言う

全員の子どもの声を聴きたい

一人一人になぜそれをやりたいか意見を聞く

なぜやりたいのか？「おならするところが面白いから」「くまさか先生の話し方が面白いから」など全員が意見を言う

話を聞くうちに『どろぼうがっこう』の面白さがわかり大多数がそちらの方向に流れる中、A ちゃんはどうしても「手品のところがやりたいから」『おしりたんてい』をやりたいと揺るがない

全然決まらないなぁ。もういっそうのこと2つやる？

今年のきりん組は『おしりたんてい』と『どろぼうがっこう』の2つを分けてやることにする？

えっ？いいよって返ってくるかと思っていたのに…

Aちゃんが納得するまで『どろぼうがっこう』の面白さを出し合い『おしりたんてい』だと「人前でおならをするのは恥ずかしい」など意見も出た。それでもAちゃんは、一人でもやると揺るがない。Aちゃんの気持ちを分かろうとしている。

Aちゃん意思が固いな

みんなすごい、優しいな

さらに話し合いは続く中「みんな一緒にやりたい」「みんな一緒がいい」という意見に A ちゃんの気持ちが少しずつ動き出す

子どもの気持ちにびっくり！

みんなで確認し、満場一致で『どろぼうがっこう』に決まる

光がみえてきた

＜考察＞

・様々な活動を通して友達とかかわり互いの思いや考えを共有していった中で、普段意見が言えない子も自分の思いを伝え「そうだね」「いいね」と言われる経験が増えた。その経験の中で自信に繋がり、今回の話し合いでは子どもたちが何をやりたいか声が上がるまで待つことができた。始めのうちは自分のことだけの意見だった子どもも友達のことを考えて思いやる意見が出てきた。子どもの発信がとても嬉しく面白さを実感した。

・ハロウィン活動の経験が土台になって今回の話し合いに繋がったと感じている。

・担任は「年長だから！」というプレッシャーがある。だからこそ担任が引っ張りがちな発表会。しかし、今回の取り組みの結果、子どもは「きりんぐみのみんな」でやった達成感と喜びが大きかった。

・話し合い活動がとても長く、担任は焦り、ドキドキ、大丈夫かな？と不安でたまらなかった。しかし、子ども達がじっくり考えたからこそ、決定後はイメージが共有でき、準備や表現練習がとてもスムーズで、劇としてまとまりが早かった。子ども同士話し合うことで、面白い発想がたくさん生まれてきた。

≪職員全体の学び≫

子どもたちが主体的に活動することで子どもならではの発想や子ども同士の共感が多くなる。また保育士の子どもの捉え方や関わり方によって子ども同士の学びや気付きが増えていく。我慢強く、じっと見守り、子どもの力を信じ、待つことの大切さが保育士には必要であることを一番学んだ。

子ども主体の協同的な学びプロジェクト　　平成 30 年２月２６日(月)

墨田区ひきふね保育園

〇社会福祉法人愛理会理念

ハートをつないでほっとホーム

未来にはばたく子どもたちの　夢・生きる力を育み

保護者・職員・地域社会がともに育ちあう

〇保育目標

・健康な体を作る

・豊かな心を育てる

・より良い人間関係と社会性を育てる

〇園児定員

０歳児１２名・１歳児１９名・２歳児２０名・３歳児２０名・４歳児２０名・５歳児２０名

＊担任が大切にした事＊

・子どもの声に耳を傾ける

・子どもが悩んだ時には一緒に悩み、一緒に考える。

・子どもと一緒に遊び、一緒に楽しむ。

・子どもの遊びの保障(デイリーの見直し)

・子ども達の楽しんでいる事や遊びが広がる様な環境設定。

・子ども一人ひとりが自分の意見を言える場、聞ける場、折り合える場を設けた。(そら組子ども会議)

・散歩場所を子どもの遊びによって考える。

＊子どもの姿＊

・遊びが持続するようになった。

・戸外遊びと室内遊びが結びつき遊びが広がる。

・友だちと一緒に考えたり、“こうしたら？”など提案し合う姿が見られる。

・子どもからそら組子ども会議の議題を出すようになった。

・子ども一人ひとりが思いや意見を言えるようになってきた。又聞けるようになってきた。

・遊びを通して考える力が育ってきた。

＊みえる化(可視化)＊

子どもが議題を提案！！

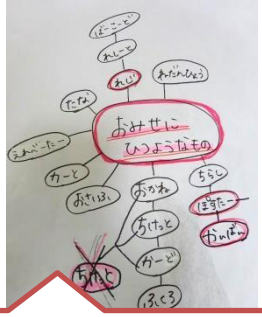
そらぐみ会議

【そらしんぶん】

遊びを主に写真メインで伝える。１週間分を掲示し前後が見えるようにす

【そら組子ども会議録】

見返せるようにファイルに閉じた



【デザインマップ】

１回チャレンジ！苦手だった…

＊考察＊

全員でお店屋さんごっこをすることにスポットを当てていたが、日々の保育の中で少人数から始まる子どもの今楽しんでいる遊びに着目した。子どもはただ遊んでいるわけではなく遊びを通して、『友だちと一緒に考える』『自分の意見を伝える』『友だちの意見を聞く』『友だちと折り合う』『興味・関心が広がる』『集中力』『持続』等を得ている。その為普段から、子どもの“発見・興味・やってみたい”という声や行動を見逃さず関わりをもっているが更にその声を拾い、一緒に考え、一緒に楽しみ遊んだ事により子どもたちの遊びがどんどん発展していく。一緒に楽しむ事が大事だが、大人が入り過ぎてしまうと子どものイメージが薄れてしまう為、子どもの遊びを見ながら出入りする。その為子どもの遊びに合わせた環境作りがとても大事だと感じた。子どもの遊びに合わせた環境を作っていくことで更に遊びが広がっていく。

初めは子ども主体の協同的学びと聞き考えすぎてしまったが、普段している保育と同じだと思いこれからも子どもと一緒に楽しむ気持ちを共有していきたい。

【子どもの姿】

①LaQ、工作、積み木、お世話遊び。一番は身体を動かすことが大好き。

②自分のイメージしたものを作る事が楽しくなり夢中になって作っていた。

③内容、内装、売り物、全てを子どもたちが考え大成功。1人休みの為19人でぐりぐらショップを開催。

④なんか会議みたいという声が上がり、子どもたちがこのネーミングを決める。

⑤「第2回目もやりたい」「作るの大変だけど20人でぐりぐらショップやりたい」と声があがる。

⑥外遊びよりも室内遊びが楽しい！遊びが途切れず、続くようになる。

⑦水に浮かぶ遊具作りを友だちと行う。試してみて分かったことの発見がたくさん出てきた。

⑧マジックショーの影響により、真似をして子ども同士でマジックの道具を作り上げ披露する。

⑨もしかしたらぐりとぐらがこのトンネルにいたのではないか?そんな発想から7人で家を作り完成させる。

⑩週末1人の子が公園に行き家を確認すると壊れていたことが発覚し、室内で作りたいと声が上がる。5人で家作りの為に必要な物・家の設計図を描き園庭で木の棒等を探し始める。隊長・平社員と呼び合い遊んでいた。この呼び合いをきに㈱ぐりぐら館を設立しやりたい！と言う子どもが増える。

【㈱ぐりぐら館決まり事】

●役職がある・会長、社長、副社長、専務など
●体験チケット・会社の見学が出来試しに働ける。
●入社テストがある・①面接　②設計図を見せる
●仕事の頑張りによって昇格・降格がある
●会社を辞めるときには・
①会社で頑張った人・感謝の手紙を書く
②頑張れなかった人・ごめんなさいの手紙を書く
③折り紙で何かを作りメダルにする

⑪ぐりとぐらが住むことが出来る家が完成する。ベット・イス・棚・洗濯物干し・固定遊具等を木の棒を使い作る。クラス全員に木の棒拾いの手伝いをお願いする。

⑫レンガ・積木・カプラ・動物等の構成遊びをとっておき遊びの続きを楽しむ。

【出来事】

4月
①進級

6月
②工作遊びの充実

7月
③縁日ごっこ・ぐりぐらショップ
④そら組子ども会議

8月
⑤第2回ぐりぐらショップ開催

9月
⑥室内遊びの充実

⑦試してみよう

10月
⑧父母会主催のマジックショー

11月
⑨公園の砂場でぐりぐらの家作り

⑩株式会社『ぐりぐら館』設立

12月
⑪㈱ぐりぐら館の充実

2月
⑫構成コーナーの充実

【保育者】

①まごと・机上・絵本・構成のコーナーを設け新年度をスタートさせる。身体を動かす事を好んでいたため主に戸外やホールでの活動が多い。

②子ども達が工作に夢中になる。そのままごとコーナーを撤去し工作コーナーを設ける。工作で使用するものは廃材を利用し、保育者や保護者に協力を仰ぐ（牛乳パック、トイレットペーパーの芯など）

③縁日ごっこでお店屋さんをすることが決まり、子ども達に伝える。内容等は子どもたちの案で進めていく

④椅子を輪にして座り話し合う。子どもが出した意見を紙に書いて貼り出す。

⑤第一回ぐりぐらショップで作り販売した遊具がたくさん残ってしまった為どうするか子どもたに投げかけた。子どもたちの“やりたい”という気持ちを受け止め、第二回目に向けて話し合っていった。

⑥室内あそびが持続できるようにティリーの見直しをし、朝の当番活動（カメたろう当番・水やり当番）を昼食後に変え室内あそびが持続出来るようにした。

⑦のりやガムテープ・芯など様々な廃材を使い作っていたが「やってごらん」という姿勢で見守る。やってみての気づきや発見が多かった為共有できる場を設けた。

⑨ぐりとぐらの家作りを始めたので、傍で子どもたちの声に耳を傾け、受け答えをしながら見守った。作った家は、壊さずそのままにして帰園した。

⑩室内で、ぐりとぐらの家作りを始めた子どもたちが「隊長・平社員」と呼び合っていた為「会社みたいだね」と伝えると会社作りが始まった。会社にはどんな役職があるのか一緒に調べた。家作りに必要な、どんぐり・枝・などを使いたいという声があがり子ども達と公園選びを行う。家作りに悩んでいた時、3択位方法を提案し選ばせる。一緒に家具作りを行い、㈱ぐりぐら館の社員になり一緒に楽しみ一緒に遊ぶ。

⑪子どもの遊びが広がる様にテーブルを2台に増やし、コーナーを設けた。

⑫工作コーナーをなくし、構成コーナーを設ける。